

それは氏子中特定の家のみが祭祀の特権を有してゐる所謂株座なるものと、氏子或は村民の全部が一様に座に與る村座なるものと、そのいづれを以て宮座本来の形と考へるかの問題と關聯して容易に決し難いところである。著者は前著以來株座を以て宮座の本體とする従來の通説を斥けて、むしろ村座のそれに先んじて存すべきことを説かうとされてゐるやうであるが、これはなほ今後多くの吟味を必要とするものであらうと思はれる。筆者はなほこれら起源論から離れて宮座が共同勞働組合としての「ゆひ」や「もやひ」華儀組合としての無常講、乃至近世法制的秩序としての五人組等我國村落に古來存する他の組織と如何に相關係するか、その現状とその歴史如何といふが如き問題のなほ全く遺されてゐることを思ふ。要するにこの書は學界に於ける宿題の解決の故にはなくむしろ新なる問題と資料を提示したところにその高き價值を買はるべきものであらう。(A5判、五八七頁、東京弘文堂發行、定價六圓八十錢)(樂田)

## 尊皇論發達史

### 三 上 參 次 著

明治維新の宏業が漸くその緒に就いた時、我が國は早くも開國進取の國是を中外に闡明して、それより後政治・社會・學問・思想・藝術等、諸般文化に互つて急激に歐米諸國の風を攝取するに至つた。されば幕末における熾烈なる尊皇攘夷運動が明治維新の

重要な因由をなしてゐるにも拘らず、明治時代の初期にはこれが一層高次の展開は始く見られることなく、又これに對する歴史的反省も多く加へられることなくして經過した。従つて當時歴史書としては大日本史・日本外史等が世上に流布したに過ぎない有様であつた。然るに明治維新の宏業が漸く成り、我が國は中央集權的統一國家としての新しい政治活動を開始しようとする時機に際して、一面には當時の歐洲における史學研究の一傾向、即ち史料の蒐集整理と考證主義の學風に影響せられ、且つ江戸時代以來盛んになつた考證の風と合致して、ここに漸く新しい修史事業が企圖せられるに至つた。而して斯かる事實の根柢には、實に總ての事象が一定の時間的秩序を以て發展し來つた跡を正確に知り、以て國運の進展に貢獻するといふ意味を強く持つてゐる。國史の成跡を最も正確な最も多數の史料を集積することに依つて深く理解し、更にそのことに依つて未來の發展に貢獻せんとする意識が強く働いてゐる。斯くの如き性質は明治時代の如き國家意識の昂騰せる時代において當然來るべきものであつた。

斯くて明治時代前期においては、文明史的方法が隆盛を極めると同時に、一方には東京帝國大學を中心とする考證的史學が着々その基礎を固めてゐた。即ち博く史料を採訪すると共に、史料の價值に就いて嚴止なる批判を加へ、正確なる史料のみを統合して所謂客觀的な正確な事實、有りの儘の歴史事實を再現しようといふ主張に立つて、史實の究明に顯著な業績を擧げるに至つた。

東京帝國大學名譽教授故三上參次博士は、斯くの如き我が國史

學の建設の時に當つて、よく斯學界の統理と後進の誘掖指導とに挺身せられ、以て偉大なる業績を貽されたのである。就中、近世江戸時代史、殊に明治維新の因由をなした尊皇論の研究には新境地を開拓せられたのであつた。而してここに掲げた「尊皇論發達史」は、博士が明治四十年頃より大正十五年退官せられるに至る迄の間に、屢々大學において講ぜられ、且つ幾度か改稿増補の筆を加へられた講義案を基となし、博士の歿後、高弟辻善之助博士指導の下に桑田忠親學士がこれを整理して、三上博士著作集の第一冊として上梓せられたものである。

三上博士は先には東京帝國大學の講壇及び史料編纂に専念せられ、後には宮内省の明治天皇御紀及び公刊明治天皇御紀の編纂に盡力せられた爲に、その生前著書として出されたものは「白河樂翁公と徳川時代」等があるに過ぎなかつた。然るに本書が博士の遺稿刊行の第一冊として公にせられたことは、辻善之助博士が「抑々勤王思想の發達は本邦近世史の樞軸であり、これを中心として江戸時代の歴史は展開したのである。讀者若しく本書を玩味熟讀せば、明治維新洪謨の由來する所遠きものあり、現代皇國紹隆の源深きものあるを知るに庶幾らんか」と云はれてゐる如く斯界にとつての慶福であり、殊に近世史研究者にとつての喜悅である。

本書の主なる内容は、第一編 皇室と江戸幕府、第二編 勤皇論の發達の二編より成つてゐる。第一編は朝幕關係の推移を述べられたものであつて、即ち江戸時代初期以來の朝廷と幕府との關

係を概観せられて、幕府が事ある毎に朝廷控制の政策をとり、皇位繼承の御事に迄も干渉の手を伸ばしたこと、しかもその間に竹内式部・山縣大貳等の事件、或は尊號事件等に依つて、次第に朝威更張の氣運が昂まつて來た所以を解明せられてゐる。第二編は勤皇論の學說としての起源を説き、更にその沿革を評述せられ、恰かも精密且つ老成なる尊皇思想家列傳の觀がある。即ち早く藤原鶴高・林羅山等の學說において程朱學と勤皇說との關聯を考察せられ、更に崎門派・水戸學派等の諸學者に至つて、愈々鮮明なる尊皇思想として展開した所以を攻究せられ、最後に神道派、國學者の熾烈なる尊皇論を闡明せられてゐる。従つて尊皇論或は尊皇思想家、又は尊皇論の昂騰に伴ふ諸事件の究明に就いて不朽の業績を貽し、後進を裨益する所誠に大なるものがあると云はなければならぬ。しかしながら更にこれ等の諸事象が如何にしてその時代との關聯において統一的・全體的構造を持つて來るかといふことは、蓋し後進に對して提起せられた重要なる問題であると思ふのである。(富山房發行、五六五頁、定価五圓五十錢(時野谷勝))

## 正倉院考古記

傳 蒞 子著

羅振玉、王國維二碩學の薈浴以來、京都は北京學界と淺からぬ因縁を生じたが、本書の著者傳芸子氏を京大及び東方文化研究所